



「文武八車の両輪のごとく、一も闕てはかなひがたき由、古人もいへり。勿論治世には文を用ひ、乱世にハ武を以て治るとハ有ながら、治世に武をわすれず、乱世に文を捨ざるが、尤肝要なるへし。」

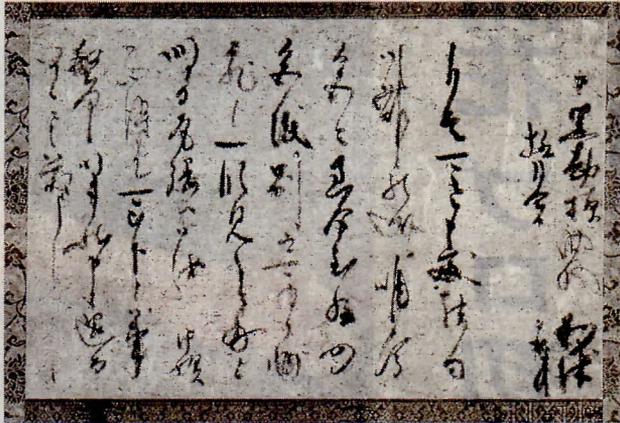
官兵衛は「如水遺事」で大将には文武双方が必要と説く。それも、平時には武を忘れず、乱世に文を捨てないことが最も大切と強調する。平時に武を忘れると、俄かに兵乱が起こったとき、どのように動けばよいか分からず慌ててしまう。乱世に文を捨てると、家臣、領民を慈しむ気持ちになくなり、忠義の気持ちもすたれ、たとえ一時の勝利を収めても長くは続かない。

文武両道の追求

茶の湯、連歌に研鑽積む

文を好むというのは、書を多く読むことでも、詩を作り故事を多く覚えることでもない。物の道理をわきまえ、諸事についてよく考え、善悪をただして賞

罰を明らかにし、慈悲の心を持つことである。



黒田官兵衛あて千利休書状(上)と如水夢想之連歌写(福岡市博物館所蔵)



また、武を好むというのは、武芸を好み勇ましいことをいうのではない。軍の道を知り、常に戦いを鎮める知略を持ち、よく兵を指揮して信賞必罰を徹底することを行い、自分の武勲に

こだわるのは大将の武道ではないと説く。官兵衛は大将の文は善政に役立つもの、武は全軍の指揮を執る能力と考える。文を重視した官兵衛で特筆されるのは茶の湯と連歌である。当時の戦国武将の間では茶の湯が流行しており、官兵衛もたしなんでいた。信長、秀吉の茶頭であった津田宗及の茶会に天正13(1585)年、官兵衛が参加したことが「宗及茶湯日記自会記」に記されている。また、千利休とも親しくしており、官兵衛あての利休の書状も残っている。晩年には「黒田如水茶湯

定書」三カ条を書いて水屋に掲げさせ、利休流の素朴な心得を説いている。

連歌も戦国時代に武家の教養の一つとして流行した。連歌とは複数の作者により上の句(五七五)と下の句(七七)を順に作っていく和歌の連作であり、相手の詠んだ句に関連させて詠まなければならず、相当な文学的素養が必要である。

官兵衛は母の影響で幼少の頃より連歌に親しみ、京でも当代随一の武家文人、細川幽斎をはじめ公家衆、連歌師の里村一門と親密に交際し、連歌など歌学の研鑽に努めた。晩年には福岡で家族と太宰府天満宮に奉納する連歌の会を催し、官兵衛が発句を詠み、妻の光姫、嫡子の長政らが続けた連歌が残っている。

官兵衛はこのように文武両道を追求し、当時最高の文化人から認められる武将であった。(播磨の黒田武士顕彰会理事 今藤久夫)